

広報FDだより 2005年11月1日発行



教育上の著作権

教育機関における著作物の複製は、著作権法により認められています。しかし、何でもOKではなく制限はありますが、実際は使用者の拡大解釈により、かなり危ないことも結構行われていると思われます。よって本特集では、改めて著作権問題を考えてみました。以下に関連する著作権法の項目と具体的内容を抜粋します。

〈教育機関における複製(第35条第1項)〉

授業の教材として使うための複製・配付

【複製・配付の条件】

- (1) 営利を目的としない教育機関であること
- (2) 授業担当教員、またはその授業を受ける者が複製すること

※大学や教育委員会が複製・配付することは不可

- (3) 本人の授業で使用する

※以下の項目は不可である

- ・学校の教育計画に基づかない自主的な活動(研究会、サークル、同好会等)
- ・授業に関連しない参考資料の使用
- ・学内LANサーバーに蓄積すること
- ・学校ホームページへの掲載
- ・他の教員が録画したビデオ、DVDの使用
- ・家庭学習用プリントの配付

- (4) 授業で必要とされる限度内であること

※必要部分、必要部数のみ

- (5) 既に公表された著作物であること

- (6) 著作者の利益を不当に害さないこと

※以下の使用は不可である

- ・高等教育の教科書として使用される図書のコピー(参考書、演習書、問題集等を含む)
- ・ライセンス契約範囲を超えたソフトウェアのインストール使用
- ・レンタル用として頒布されたビデオ、DVD

- ・放送番組等をライブラリー保存を目的として録音・録画すること
- ・大教室での使用(1クラス人数は概ね50名程度を目安とする)
 - ・複製して製本するなど市販の形態に類似すること
 - ・同一の新聞・雑誌のコラム等の継続使用
 - ・継続的な複製により、結果として大部分を複製する場合
- (7) 原則として「出所の明示」をすること

最後に、著作物を創った人(著作者)が、自分の著作物を他人に自由に使ってもらってよいと考える場合に、その意思を表示するためのマーク(自由利用マーク)があります。以下にマークとその内容を示しますので、適宜ご利用ください。

「プリントアウト・コピー・無料配布」OK マーク



「プリントアウト」「コピー」「無料配布」のみを認めるマークで、変更、改変、加工、切除、部分利用、要約、翻訳、変形、脚色、翻案などは含まれません。そのまま「プリントアウト」「コピー」「無料配布」をする場合に限られます。

「学校教育のための非営利目的利用」OK マーク



学校の様々な活動で使うことを目的とする場合に限り、コピー、送信、配布など、あらゆる非営利目的利用を認めるマークで、変更、改変、加工、切除、部分利用、要約、翻訳、変形、脚色、翻案なども含まれます。

*** 教育著作権情報 ***

- ・著作権法第35条ガイドライン協議会

<http://www.suken.co.jp/subject/jyoho/inet/inet10/inet10-1.pdf>

- ・独立行政法人 メディア教育開発センター(NIME)「教材開発・利用に関する一問一答」 <http://deneb.nime.ac.jp/faq.html>

- ・自由利用マーク(文化庁) <http://www.bunka.go.jp/jiyuriyo/>

第2回室蘭工大教育ワークショップ (WS) ・ドキュメント

9月29日から30日かけて、洞爺湖温泉にて「第2回室蘭工大教育ワークショップ」が開かれました。「やる気を育む授業の創造」をテーマに、ベテラン教員から新任教員までの対象者20人、それに伊藤理事とTF(タスク・フォース)6人、そして教務課職員3人の計30人が参加しました。

【緊張感漂う中のスタート】

1日目、正門前に8時40分集合。少し緊張した雰囲気の中、バスに乗り込み、車中で自己紹介。晴れ渡った空、光る洞爺湖を横目に10時前に会場に到着。10時30分から、FDとは、WSとは、TFとは、といった鈴木FDWG委員長のミニ講義を受けると、早速5人ごと4班に分かれて、アイスブレイキング。20分



という決められた時間内に各班の名前を決め、班のロゴマークを作成し、その後、名前の由来などを発表する。短時間での共同作業を通じて、班員同士の壁を壊し、自由かつ活発な発言を促す。今回は、班員の研究が、津波や電磁波、情報の波など波にかかわること、そして荒波を乗り越え、新たな波を作りたいという「Wave Hunters」班が、「アイスブレイク賞」に輝いた。



「アイスブレイク賞ロゴマーク」

【少し慣れてきて】

11時40分から「本学の中期計画と本学の進むべき教育の方向」という理事の講義を受け、昼食後は班

ごとに本学の教育への提言を議論し、まとめて発表。15時20分からは、講師として来ていただいた椿淳一郎先生(名古屋大学)が「覚えることは分かることではない～メモリーではなくCPUを使ってみよう～」



と題して1回目の特別講演。学生たちに「強制的に質問させる」という、先生の教育実践とその効果が紹介された。16時になると「学生のやる気をどう引き出すか」とのテーマで、やはり班ごとに議論しまとめて発表。そこでは、学生たちがやる気を出し切れていない原因として、目的意識の欠如、授業内容と学生のレベルの不一致、学生と教員との距離感などがあげられ、その対処法も論じられた。そして、18時30分からは、椿先生による2回目の特別講演。ここで先生は、「大競争時代の中、大学は、『人材の育成』ではなく『人格の完成』を目指す教育をしてこそ勝ち残れる」と強調。

【盛り上がった、遅い夕食】

20時になりようやく夕食と懇談。その後は、2次会部屋で遅くまで語る人たち、カラオケに向かう人たちと、普段なかなか接することのできない者同士が、それぞれ親睦と議論を深め合った。

【仕上げの2日目】

2日目は朝8時40分から、導入教育を前提に「やる気の出る授業計画をつくる」のセッション。これもまた班ごとに、新入生を対象とした班員全員による魅力ある授業を考え、授業計画や評価法をも検討して、最終的にはシラバスを作成する。途中2回の中間発表と全体討議を経て、昼食後13時30分から最終報告。ちなみに「ワークショップ賞」受賞班の授業名は「心理数学論」。心理学担当者がニュートンらの「偉人・変人論」で科学者の意外な姿を紹介し学生を引きつける。次いで数学と物理の担当者が微分方程式の魅力

伝授した上で、最後には学生たちに新たな定理作りに挑んでもらうという。この班によると、学生たちのやる気を引き出す授業とは、結局、教員自身が「おもしろい」と思える授業ではないか、と。学生たちに夢を持たせるには、まずは我々教員自身が夢を持って、それを率直に語っていくこと、との発言も。効率化の大合唱の中での、「愚直さの復権」であろうか。

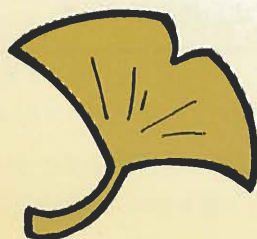


【お疲れさまでした】

14時から、プリアンケートをもとに最終的なまとめをし、総評、表彰、修了証書授与、記念写真撮影といった一連の「儀式」を終え、バスにて本学に向かう。16時40分解散。

こうして長いような、短いような1泊2日の研修を終えたのです。今年の研修の最大のねらいは、室工大独自のFDを目指すことで、資料作りから会の進行まで、全て本学のスタッフが行ないました。その成果のほどは今後を見守るとして、少なくとも参加者が、本学の問題について語り合える仲間を増やしたことは確かでしょう。このような場が、本学発展のエネルギーになることを期待します。

ちなみに18名の先生に出していただいた「終了時アンケート」では、「とても有意義だった」5名、「まあ有意義だった」9名、「普通だった」2名、「あまり役立たなかった」2名でした。また「椿先生の話が聞けてよかった」、「普段交流のない先生方と知り合えてよかった」といった声は多くあがっていました。



FD文献紹介 (5)

「シカゴ大学教授法ハンドブック」

アラン・ブリンクリ他著 玉川大学出版部
¥2,100

私立大学では、教育改革の重要な行事として出来るだけ多くの教員を外国に派遣するという。つまり外国では、日本とは比較にならないほど刺激的でかつ面白い授業が多らしい(本学でも外国出張で、教育活動に大きな刺激を受ける教員が多い。しかしすぐ冷めてしまうのは、やはり制度的に問題があるからであろう)。日本との大きな落差は、教員の教育に対する姿勢であることが本書を読めば一目瞭然である。目次は以下の通りである。1章と2章で授業の準備と最初の数週の内構え、3章が教室でのディスカッション、4章が講義の技法、5章がライティングの指導、6章が試験と評価、7章から9章までがティーチングの評価やアシスタント、10章が電子リソースの利用に関する内容である。著者の主要メンバーが歴史学会の幹事ゆえ、本書は歴史学の教育を念頭に書かれているが、その内容は理系にももちろん有用である。むしろこうしたマニュアルは、異なった学問分野から多くのノウハウを学ぶことができる場所にポイントがある。

教員がなすべきことは、「早い段階でクラスの習慣を作り上げ、要点を明確にし、納得できるような具体的な実例を与え、明確な結論に導くよう」毎回の授業を設計することであると力説している。学生を馬鹿にしたがり恥をかかせたり、脅かしたりしてはいけない。できる限り、学生の長所を見つけだし励ますことから自信が芽生え、やる気が出るという。デスカッションでは、できるだけ反対の意見にも耳を傾け、質問をし、異なる考え方を受け入れる訓練を徹底的にするそうである。ゴールを明確にし、それにいたる道筋を学生と教員が共に考えることが必要だという。レポート課題では指針を設定することは教員の期待や要求を知らせるだけでなく、学生を補助することを意味する。それは評価にも通じ、評価基準が教員、学生相互の理解を得る必要がある。学生からも教員からもあまり好まれない試験についても「重要なことは、試験のための戦略と授業のための戦略は共存するということです」とのこと。

「フレッシュマン・セミナー」

教員が抱えている問題は数知れずありますが、まず新入生対策が挙げられるでしょう。学生自身が、入学した学科はどのような学科なのかを知り、今後4年間のモチベーションを持つことが重要です。そして泥臭いところもあるエンジニアへの道を見据えてもらう。この目標のために、先輩もوراやむ「フレッシュマン・セミナー」を独自に開講している機械システム工学科（戸倉先生）、電気電子工学科（松田先生）、材料物性工学科（清水先生）そして応用化学科（松山先生）の担当者にお集まりいただきました（図1）。授業の紹介（表1）と自由な意見交換の一端を紹介します。

表1. 各学科のフレッシュマン・セミナーの概要

学科	機械システム	電気電子	材料物性	応用化学
担当	全教員	3名	2名+全教員	3名+全教員
学科概要説明		○	○	
履修ガイダンス	○		○	○
講義		○	○	○
実習	○	○	○ ○	
研究室見学	○		○	○
TA	各研究室から1名	実習ごとに5名 (計10名)	なし	なし
開講期	前期	前期	前期・後期	前期

機械システム: 4つの大講座から2つを選んで、5週で組まれた実習を行う。

例えば、ディーゼルエンジンの分解・組み立て・運転、ブリッジ・コンテスト、プチ自走ロボット設計、ペットボトルロケットなどのテーマで行われ、この授業をエンジニアリングデザインを意識した「ものづくり」入門編と位置づけている。

電気電子: 接続教育の他に、基本的な実習を主として組み立てられている。

アナログ・デジタル回路(5週)では多種類の回路に挑戦、さらにオシロスコープ、モーター、コイルなどの電気の基本(5週)を押さえている。その実験書は高いレベルに仕上がっており、担当者の努力が見えてくる。学生も教員も「手を動かしている」。

材料物性: 前期は「工学の読み書きソロバン」を修得させることに徹底している。新聞でも取り上げられた「卵

パッケージコンテスト」は珠玉であろう。実はそこにもPDCAが形成されていた。与えられた問題をよく理解し、情報収集、アイデアの創生、計画実行、プレゼンテーションと完全系を目指している。後期ではさらに進化するそうだ。

応用化学: 6週の講義に特徴があり、社会経済と化学との関連性を説いている。実習は設定されていないが、研究室回りの中に教員の自主的な実験・実習を求めている。少しでも多くの研究室を見てもらい学科イメージを作ってもらっている。魅力的な研究室に触れると、レポートは質・量とも充実するという。



図1. 座談会風景

新入生に学科を知り、分野を知ってもらう方策に実習をどの程度盛り込むかは、学科により差があるが、共通していることは「先生は君たちを大事にしているんだ!」という熱血先生が引っ張っていることである。無い無い尽くしの中、がんばっている先生方が一番必要としているのは、まず広い場所だそうだ。

編集後記

今号の「広報FDだより」では、先日開催された室蘭工大教育ワークショップについてお知らせしました。研修生20名、スタッフ10名、講師1名という布陣でしたが、皆一丸となって教育を良くするために奮闘する様子に、なせばなる!の思いを新たにしました。後の課題は、そのための時間をいかに確保するか、でしょうか?